石川県内におけるヤマネの生息状況

三原ゆかり・野崎英吉　石川県白山自然保護センター

DISTRIBUTION OF JAPANESE DORMOUSE *(GLIRULUS JAPONICUS)* IN ISHIKAWA PREFECTURE

Yukari MIHARA and Eikichi NOZAKI , *Hakusan Nature Consevaion Center, Ishikawa*

はじめに

ニホンヤマネ*Glirulus Japonicus*（以下ヤマネと記す）はネズミ目ヤマネ科に属する小型哺乳類である。日本固有種で，国の天然記念物にも指定されている。1991年の環境庁（現，環境省）によるレッドデーターブックでは希少種にランク付けされている。

国内における分布は，本州，四国，九州の山地帯から亜高山帯の森に棲み，冬には冬眠することで知られている。

実際の分布状況については，第４回自然環境保全基礎調査（環境庁自然保護局，1993）によると，やや情報量不足として，局所的な分布結果が報告されている。その後，確認地域は増え，山梨県においては環境教育施設として「ヤマネミュージアム」ができるなど，一部の地域では分布の詳細や生態実態が明らかにされ，普及が進みつつあるが，全国的には十分な情報を持たない地域が多い。

石川県においては，1977年に二つの地域から死体が発見されたことを花井（1977）が初めて報告している。

その後は，1994年から石川県白山自然保護センターにより，希少動物の情報を収集するために，管轄する各ビジターセンターに目撃情報を記入する用紙を置き情報収集に努めたが，ヤマネに関する確実な情報は，まったく得られなかった。また，吉野谷村地内の落葉広葉樹林において，巣箱を設置した調査も行ったが，同じくヤマネの情報は得られていない。

林（1999）は県内で得られた６件の情報を発表したが，1977年の情報量よりさほど増えてはいないところから，石川県での生息数は少ないのではないかと述べている。

平成15年に市ノ瀬ビジターセンター内において，偶然にヤマネが入り込み，これをきっかけに，他の地域でも新しい目撃情報が数件集まった。また、これまでに石川県白山自然保護センターが入手していた情報で，未発表のものもあったので，これらを併せて報告する。

最新の分布状況

石川県での分布状況は，林（1999）によるものが最新であったが，今回は新たに８件の情報が加わり，合計14件となった。目撃した具体的な場所や年月日は表１にまとめ，５㎞メッシュの分布図にして図１に示した。

この結果，県内での水平分布は，おおまかに北は金沢市，南は白峰村，東は吉野谷村，西は小松市までで，垂直分布は標高230m（吉野谷村市原）から2,450m（白峰村白山室堂）までと，幅広く生息していることがわかった。1999年の分布図（林，1999）と比べると，今回は分布を示すメッシュは，５区画増えた。

これまでの情報を整理すると，目撃の時期は春先が８件（内，一つは死体）と多い。目撃状況は，雪上や雪中で冬眠姿勢の丸まった姿での確認が７件と最も多い。目撃地の環境は，人里から離れた，山中での情報が９件と最も多く，標高600～1,350mの落葉広葉樹林内である。他に建物内や巣箱，駐車場内

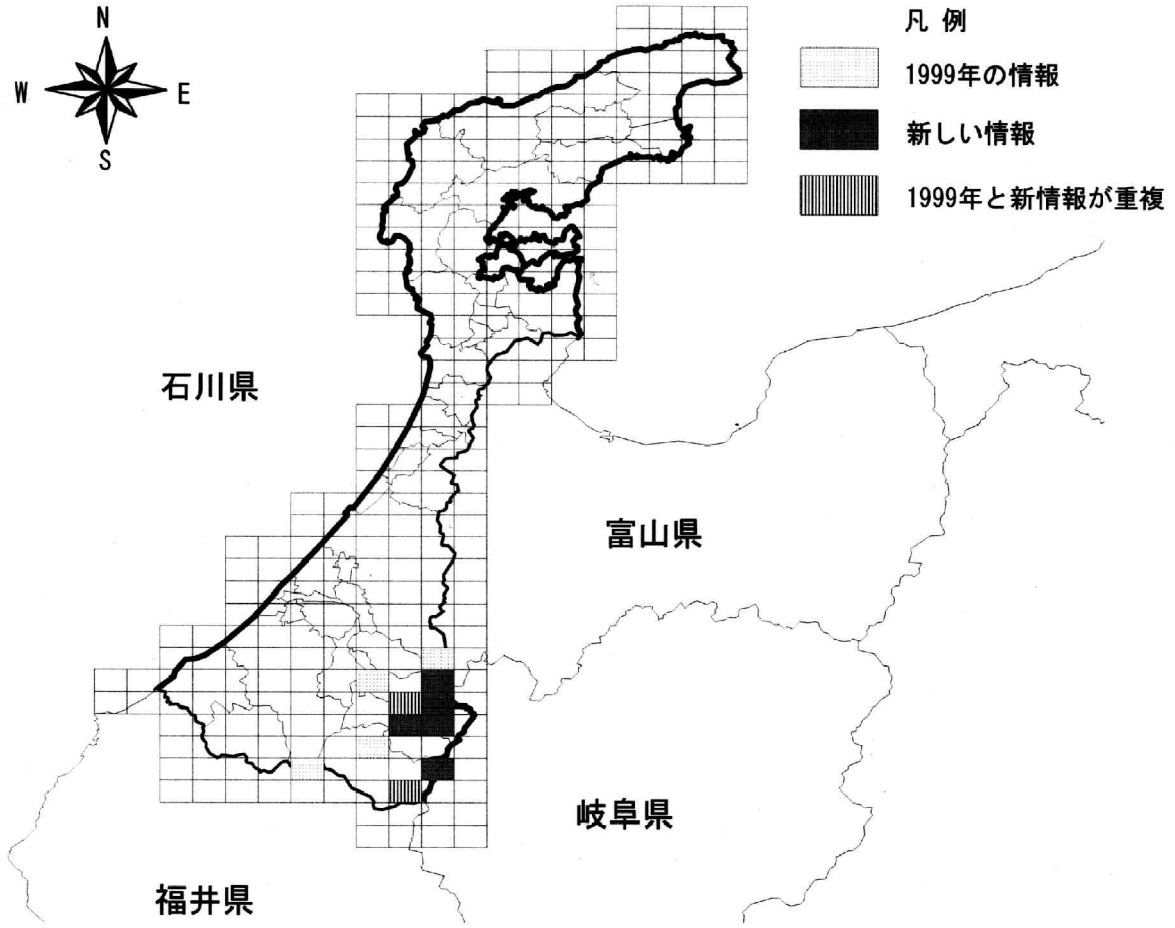

図１　石川県のヤマネ分布図（1999～2003年まで）

表１　石川県内でのヤマネ発見情報

目撃した日	目　撃　地	標高（m）	目撃者	個体詳細や発見状況など
1971年8月7日	白峰村別当出合	1,220	水野昭憲	オス・成獣。死亡後、標本保管
1973年　春	金沢市倉谷（高三郎）	約1,150	上馬康生	死体を発見
1990年春？	吉野谷村中宮雄谷	約1,200	畑　正人	雪中で冬眠中を発見、放置
1990年春？	吉野谷村中宮途中谷	約1,000	畑　正人	雪中で冬眠中を発見、放置
1981年4月～8月	吉野谷村市原	230	三谷宏明	成獣オス・メス。巣箱内で繁殖。
1981年4月下旬	吉野谷中宮地内の山中	約1,200	山岸留吉	雪中で冬眠中を発見
1981年4月下旬	吉野谷村中宮道（温泉山）	約1,350	野崎英吉	雪上で保護、後死亡
1986年10月3日	吉野谷村中宮温泉旅館内	650	野崎英吉	布団の中にいたオス・幼獣を保護
1990年4月	白峰村桑島百合谷	600	長門直廣	動きが鈍いところを保護し別の場所へ放獣
1997年1月？	小松市新保	約750	辻　恵一	雪中で冬眠中を発見、放置
2001年4月下旬	尾口村尾添立屋谷	約1,100	松本信次	雪上で発見し、保護するが蘇生せず死亡
2002年4月下旬	吉野谷村中宮地内の山中	約1,350	喜多喜代巳	雪上で冬眠中を発見落葉の中へ移した後、放置
2002年7月23日	白峰村白山室堂比咩神社社務所	2,450	白山比咩神社	施設内で保護するが逃走
2003年10月5日	白峰村市ノ瀬ビジターセンター	830	三原ゆかり	施設内でオス？幼獣を保護後放獣

などの人工的な施設での目撃が５件あるが，周辺を落葉広葉樹林に囲まれていたり，亜高山帯の中にあるなど，いずれも自然度が高い環境の中にある施設であった。

また，全情報の13件の内３件は，オスの幼獣個体であった。

性別は全情報14件15個体のうち、４件５個体が判別できている。内訳はオス４頭、メス１頭、不明10頭であった。また発育段階では成獣３頭、幼獣３頭であった。

新たな確認個体について

今回報告する新たな情報は２件である。一件は平成14年７月23日，白峰村白山室堂の白山比咩神社社務所内の個体（写真１）が職員により保護され，記事は地元新聞紙に掲載された（掲載時は７月1日からすみついたことになっているが，実際は23日１日のみの記録である）。またもう一件は，平成15年10月２日に，白峰村白峰地内にある市ノ瀬ビジターセンター（以下ビジターセンターと記す）内に入ってきた個体（写真２）を筆者の一人が保護した。

写真１　白山比咩神社社務所内保護個体

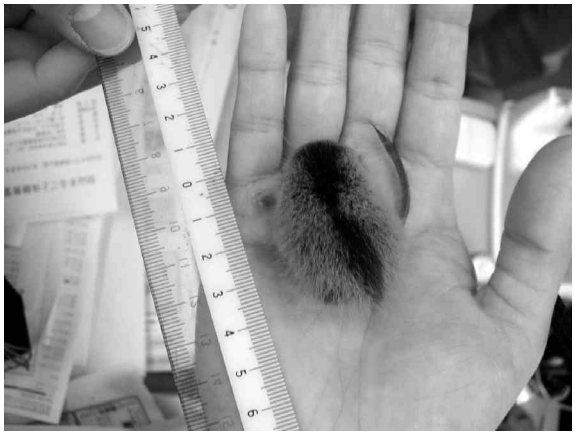

写真２　市ノ瀬ビジターセンター保護個体

白山比咩神社社務所は，白山山頂（2,702m）の南西に位置する室堂平（2,450m）にある木造平屋建ての施設で，室堂センターなどの山小屋施設も近くに立ち並ぶ。周囲の環境は，南西斜面は高さ50㎝程の草本草地が幅５～６mあり，その先は室堂センターまで登山者がいきかう広場になっている。また，南東側には白山比咩神社祈祷殿が建ち，その北側は山頂へ続く登山道がある。他の北東北西側は高さ約100～140㎝のハイマツやナナカマドの灌木林が続いている。保護された時は夏山シーズン中でにぎわっている時期であった。流しの生ゴミを捨てる三角コーナーに近寄ってきたところを社務所職員が見つけた。逃げる様子もなく動きも緩慢であったために容易に保護できたらしい。すぐに写真撮影をしたものの，その直後に手を離れて逃走し，屋内で行方不明となった。

市ノ瀬ビジターセンターは，白山国立公園内の市ノ瀬集団施設地区にあった登山センターを新しく建替えて，平成12年度に供用開始した鉄筋コンクリート２階建ての施設である。市ノ瀬は昭和の始めまでは出作りや集落，温泉旅館などが周辺にあり賑わいをみせていたが，昭和９年の手取川大水害でほとんどの家屋は流失した。大量に流れ込んだ土砂で河原が広くなるなど，環境が激変する大打撃を受けている。昭和30年代までは人の出入りは通年あったが，現在では有人施設はビジターセンターと白山温泉の旅館一軒のみで，冬期は無人となっている。

建物は白山登山口の別当出合へ向かう県道白山公園線と手取川上流部の牛首川に挟まれた斜面に位置している。周辺には温泉やキャンプ場，遊歩道のある園地がある他，白山へ向かう長距離コース登山道の起点にもなっていて，春，秋の行楽シーズンや週末には賑わっている。

ビジターセンター正面となる南側は車よせと車道をはさんで旅館があり，さらにその背後にはミズナラやトチ，オニグルミなどの落葉広葉樹にスギ林がパッチ状に混生し，その中を歩道が整備されている。北側はキャンプ場のテントサイト炊事棟などがあり，さらにその背後には牛首川が流れ，すぐ上流には湯の谷川，柳谷川，岩屋俣谷川の出合いとなる。東側は来訪者用の駐車場があり，アスファルト

舗装が広く施されている。その奥の川沿いには，未舗装で駐車場を兼ねた「木かげの広場」があり，その中には径約70㎝のドロノキなどヤナギ類の大木が等間隔に数十本植えられている。西側はテントサイトや電力会社の沈砂池，その奥に市ノ瀬園地が整備されている。園地内はハリエンジュやドロノキ，オニグルミなどの高木に，中・低木としてウリハダカエデやオオバクロモジなどが生え，下草はサンカヨウやオニシモツケなどの深山のものから，ススキやオオバコなどの人里の植物なども混在している。林縁にはアケビ類やヤマブドウといった動物が好む実をつけるツル性植物も多い。

市ノ瀬は白山への入り口的な場所であるため，登山シーズン中の週末には，館内にはたくさんの人が出入りする。保護した日は秋山シーズンの日曜日であったが，人の出入りが少し途切れた午後に，自ら南側の玄関から建物の中へ入ってきた。保護した後，写真撮影と頭胴長のみ計測し，その後枯葉の降り積もる近くの園地へ放獣した。この個体の頭胴長が６㎝弱であったことから，幼獣と判断した。また，オスと推定したのは，肛門から離れた所にごく小さい突起が見られ，この目視確認により判断した。

考　察

石川県内のヤマネの分布をとりまとめてみると，山地帯から高山帯までの広い範囲であった。今回の確認された場所の最高標高は，白山比咩神社社務所内の標高2,450mであったが，近隣の富山県立山では標高2,700mにある内蔵助山荘などの山小屋施設内に迷入した例や，標高約2,000mの薬師沢小屋で繁殖した例が報告されている（富山県自然保護課，1980）。最低標高となった250mの吉野谷村市原の例は（三谷　私信），野鳥観察のために秋に仕掛けた巣箱に，翌夏ヤマネが営巣繁殖したのを確認し，いなくなるまで観察していたものである。巣箱が仕掛けられた所は，集落から近い落葉広葉樹林内である。冬も比較的温暖で照葉樹林の存在する和歌山県（湊，1984）や徳島県（中島，1997）では，標高100～200mの所でも生息していることが報告されている。中部地方においては，今回の例が最も低い標高での確認であった。

地域的な特徴の可能性について

県内で確認された写真記録のある3つの個体を見比べてみた。平成13年４月下旬の尾口村尾添立屋谷の個体（写真３ⓐ）と，今回の市ノ瀬ビジターセンターの個体（写真３ⓑ）は，後頭部の毛色の黒い部分が広いという共通点が見られた。白山室堂の白山比咩神社の個体ではこの特徴はみられなかったが，他地域の個体を図鑑などの写真から比べる限りでは，この点は特徴があるように見られた。

湊（1998）は国内のヤマネの毛色には，地域的な違いがあることを述べている。例えば山梨県と和歌山県産のヤマネでは，和歌山県産の方が目の回りの黒味が太くはっきりしている傾向があり，体の毛色

ⓐ尾口村尾添立屋谷の個体

ⓑ市ノ瀬ビジターセンター保護個体

写真３　頭部の黒い部分が広い

は南にいくほど毛色が濃くなる点を指摘している。遺伝学的にも山梨と和歌山とでは遺伝子が異なり，国内ではいくつかのグループに分かれることがわかってきたことも発表している(湊　前出）。

今回比較したのは３例のみだが，今後捕獲個体が出た際にはこの点にも注目し，また，遺伝学的な調査ができれば，さらに興味深い結果が得られるのではないだろうか。

おわりに

今回集まった情報以外にも，まだまだ埋もれた情報があるように感じる。春の山中での目撃が目立ったが，この時期の白山麓は雪が締まり歩きやすいことから，ツキノワグマの有害獣駆除の他に，春山登山で入山する人たちも少なくない。無積雪期に避難小屋を利用した際に「ネズミのようだが，少し違う小さい生き物をみた」という話を，山好きな人たちから，これまでにもいくつか聞いたことがあった。これがヤマネである可能性は高い。猟友会関係者や山仕事をしている人たち以外にも，登山者も対象にした情報収集も，今後必要と考えられる。その際，登山口や避難小屋等にも，写真などで大きさや特徴を示したものを置くなどするとイメージもつかみやすく，印象深くなる。また，本種は国及び石川県版レッドデーターブックの準絶滅危惧種でもあるので，まずは分布状況を明らかにするための，県全地域を対象とした聞き取り調査の必要性も高い。広く知られていないことと，夜行性で見つけにくいなどの理由もあるが，情報収集はこれからも継続していかなければならない。

併せて，痕跡や捕獲を目的とした野外調査を実施する際には，これまでよりもヤマネの生態などを意識した方法を導入する工夫も必要である。例えば巣箱調査を実施する際には，ヤマネはガなどの昆虫も好み（中島，1996）夜行性である点から，自然林に囲まれたキャンプ場などの施設で，夜間外灯をつけているような所の周辺も，設置場所の条件として選んでみてはどうだろうか。

今回，人間の生活圏に近い所で発見されていることもあり，今後も意外な所で見つかる可能性もある。国の天然記念物という貴重な文化財である観点からも，今後本種を見つけた際の処置など保護上の視点も押さえた普及啓発が必要である。また，継続した情報収集と生息調査，そして適切な普及により，さらなるデータの蓄積が望まれる。

最後に，本報告を書くにあたり，協力していただいた次の方々にお礼申し上げます。新しい確認情報を寄せていただいた喜多紀代巳氏，畑正人氏，白山比咩神社の職員の方々，写真を提供して下さった佐々木　崇氏，北陸中日新聞鶴来支局の松山義明氏，過去の情報について再度聞き取りに協力して下さった辻恵一氏，山岸留吉氏，三谷宏明氏，佐々木武夫氏，大乗文子氏，松本信次氏，井南睦子氏，市ノ瀬でヤマネを保護する際に協力していただいた谷野一道氏に謝意を表します。

文　献

阿部　永・石井信夫・金子之史・前田喜四郎・三浦慎吾・米田政明（1994）日本の哺乳類．東海大学出版会，88．

花井正光（1977）（14）ヤマネ　３その他の哺乳類　Ⅲ哺乳類の生息分布現況　第二部哺乳類　第３分冊鳥獣　石川の自然環境．石川県環境部，187－188．

林　哲（1999）ネズミ目　第一部陸棲哺乳類　石川の自然環境シリーズ・石川県の哺乳類　石川県哺乳類研究会編．石川県環境安全部自然保護課，49，78．

阿部　學（1993）ネズミ目　第二部調査結果　第4回自然環境保全基礎調査・動植物分布調査報告書（哺乳類）．環境庁自然保護局，94，152－153，171－172．

水野昭憲（1994）希少動物調査を実施中～ヤマネ・モモンガ・オコジョの情報をお願いします～．はくさん，21-3，2－5．

湊　秋作（1984）ヤマネ．いちい書房，東京，77．

湊　秋作（1999）ヤマネ　連載・おもしろ観察記　第13回巣からヤマネ文化をのぞいてみれば．WWF　№260，17－18．

西村　豊（1996）ヤマネ　哺乳類Ⅰ．日本動物大百科，平凡社，88－89．

中島福男（1996）ヤマネ　哺乳類Ⅰ．日本動物大百科，平凡社，90－91．

中島福男（1997年）　徳島県内におけるヤマネ発見の意義．哺乳類科学，37-1．日本哺乳類学会，74－80．

富山県自然保護課（1980）富山県の鳥獣．富山県，205．